

テーマ **長引く発熱** 平成28年度漢方医学講座・臨床講座

発熱の漢方治療

成城漢方内科クリニック院長

盛岡 頼子

(平成28年5月15日収録)

今日は、「長引く発熱」と限定してしまうと処方に限られてしまいますので、発熱全体の漢方治療ということで、お話しさせていただきます。

漢方医学における熱

漢方では、熱(発熱)の定義が、西洋医学と全く違うというところからお話しします。漢方でいう熱は体温計で測った熱ではないということです。

体温計がいつできたのか調べますと1609年、イタリアで、だそうです。漢方医学の原典が発行された2000年ほど前には体温計はなかったわけです。ですから体温計で計った熱ではないというのが大前提になります。大塚敬節先生は、「患者が熱感を訴える場合も熱であり」「体温が上昇していても患者に熱感がなく、反って寒冷を訴え、脈が沈微遅(沈んで弱く徐脈傾向)であれば(そういう状態は熱ではなくて)これを寒とする」と述べてられています(大塚敬節・矢数道明・清水藤太郎「漢方診療医典」より)。また藤平健先生も「熱感すなわち熱さを自覚することが必要で、体温計で、たとえ40度あっても、病人が寒さを感じているような場合は、これを熱といわないばかりか寒があるとすると同じようなことを言われています(藤平健「漢方医学Ⅱ」)。このことを、しっかりと、おさえていただきたいと思います。

傷寒論

発熱の漢方治療を述べるにあたって『傷寒論』は外せません。ご存知の先生もいらっしゃると思いますが、3世紀初頭、後漢の時代、中国で張仲景という人によって記されたとされています。この『傷寒論』の「傷寒」というのが、急性熱性疾患のことです。『傷寒論』は、それをについて書いた本だというわけです。日本の漢方のバイブルとされている本です。

編者の張仲景が『傷寒論』の始めの方で、次のように書いています。

「自分には親戚が多くて、200人位いた。10年の間に、その3分の2が死んでしまった。その70%が傷寒によって死んだ。それで一念発起して、傷寒を治す本、『傷寒論』を書いた」

[六病位]

『傷寒論』の中で、疾病には六つのステージがあります。また大きく分けると陽病と陰病の二つに分けられます。陽病は身体のどこかに熱がある状態ですが、以下の三つに分けられます。熱があるのが身体表面(表)なら太陽病、身体の裏(深部・消化管)なら陽明病、表と裏の間に熱があれば少陽病といいます。一方、陰病は(裏の)寒がある病態ですが、重症度によって、太陰、少陰、厥陰の三つにわけるのが基本です。陽病が三つ、陰病が三つで六病位となるわけです。

太陽病から始まって、こういう六病位のステージを辿って進行していくのが、標準的な経過です。

[太陽病]

病気のはじまりは太陽病です。「太陽病は、脈が浮いて頭痛がし、身体が痛くなったりして、寒気がする」これが太陽病と呼ばれる病態の症状・所見です。太陽病のなかには、中風と傷寒という区別があつて、中風は軽症、

傷寒は重い状態と分けています。当然、太陽病である中風・傷寒には両方とも、発熱があります。現代では発熱と読みますが、この傷寒論の太陽病のところという「発熱」、これは「ほつねつ」と読みます。太陽病で、身体の表面に熱があるので、脈が浮いて頭痛や関節痛があり悪寒がする。この時期には、麻黄・桂枝などを含んだ方剤を用いて発汗させる治療をするのが基本です。

[少陽病]

疾病が太陽病の次のステージに進むと少陽病という状態になります。「少陽病は、口が苦く、ねばつく、のどが渴き、めまいがする」太陽病で治りきればいいのですが、治りきらないとステージがさらに進んで、熱が半表半裏に及びます。すると舌が苦いとか、吐き気とか、消化器症状が現れてきます。胸脇苦満が出現し、往来寒熱(熱が出たり下がったりする)という熱型になります。これが少陽病の特徴です。少陽病の治療の原則は和法です。太陽病は発汗させるという治療でした。あとで出てくる陽明病では下痢をさせる治療もあります。しかし、少陽病では、そういう過激なことはしてはいけないことになっています。和する。身体を調和させる治療ということで、柴胡が含まれた柴胡剤を使うわけです。

[陽明病]

さらに進むと陽明病になります。陽明病は「胃家実、是なり」と書いてあります。胃家というのは、胃腸とっていただければ良いです。胃腸が実する状態、裏すなわち消化管に熱がある状態です。便秘をして、お腹が張ります。潮熱ちようねつが、陽明病の特徴的な熱です。熱が上がりきって、高熱が続くような状態で汗は出ていますが寒気はありません。熱で沸々としているような状態ですが、脈は沈んで実脈です。身体としては弱ってはいません。むしろ体力・抵抗力は充実しています。こういう状態のときには瀉下の治療、つまり下す、下痢させる治療をします。大黄が入った承気湯類などを用い